

会報

富山県公立小中学校教頭会

No 113

令和8年9月1日発行

〒930-0018

富山市千歳町1-5-1

富山県教育記念館内

富山県公立小中学校教頭会

発行者 会長 井野由里子

編集者 代表 中森 晴美

印刷 株式会社チューエツ



危機管理の要としての教頭の使命

会長 井野 由里子

会員の皆様におかれましては、日頃より各学校において、学校経営の要として多忙な職務に精励されておりますことに、深く敬意と感謝を申し上げます。予測困難な社会情勢の中、子供たちの学びと安全を守るため、日々現場の最前線で細やかな気配りを重ねておられる先生方の尽力に、心より御礼申し上げます。

私たちが直面する学校現場の安全管理は、年々その重みを増しています。先般発生した令和八年熊本地震や、東京都北区の小学校で起きた火災等に見られるように、自然災害や突発的な事故は、予期せぬタイミングで学校を襲います。私の勤務校においては、夏休みに地域や関係機関と連携した避難所開設訓練を実施し、受付手順や備蓄品の確認、初動対応の動きを入念に確認しました。「万が一への備え」について意識を共有し、二年前の能登半島地震での課題と防災マニュアルを確かめていたところ、熊本地震が発生しました。ニュースで被害の大きさを目にした時、訓練での緊張感と二年前の体験、危機管理の重要性が重なり胸が締め付けられる思いがいたしました。災害や事故は遠い出来事ではなく、今この瞬間に私たちの学校でも起こり得るのだと、改めて強く認識させられた出来事です。

有事の際、学校において最も重要な役割を担うのが教頭です。混乱する現場で素早く状況を把握し、校長の迅速な判断を支えること。教職員への確かな指示を出し、児童生徒の安全確保を指揮すること。そして消防や地域、教育委員会との「情報のハブ」となること。教頭はまさに緊急対応における「司令塔」であり、組織を動かす要です。だからこそ、日頃の避難訓練や安全点検を形骸化させず、「もし今ここで発生したら」という現実的な視点をもつて備えを点検・アップデートし続けることが、私たちの重要な責務といえます。

「まさか」を「想定内」に変え、一瞬の判断で命を守る力は、日頃からの教頭先生方の細やかな目配りと強い危機意識から生まれます。多忙な日々の中ではありませんが、教頭職同士が知見や課題を共有し合い、互いに学び合える場として、この富山県公立小中学校教頭会を存分に活用いただければ幸いです。

これからの教頭会の横のつながりを深め、支え合いながら、富山の子供たちと教職員の命、そして安全な教育現場を守り抜いてまいりましょう。会員の皆様の益々のご健勝と、各学校のご発展を心より祈念申し上げます。

令和八年度 役員紹介

◆富山県公立小中学校教頭会役員

会長	井野由里子	(富・熊野小)
副会長	中森 晴美	(黒・中央小)
副会長	砂田 和夫	(滑・早中)
副会長	山本 泰	(富・南中)
副会長	澤村 力也	(高・伏木小)
副会長	山本 哲也	(南・五箇山学舎)
副会長	柴山 秀範	(富・新庄小)
監事	政二 亮介	(富・堀川小)
監事	宮本亜貴子	(南・南砺つばき学舎)
会報委員長	中森 晴美	(黒・中央小)
会報委員	山田 智徳	(下・朝日中)
会報委員	大崎 智子	(富・大庄小)
会報委員	黒田雄一郎	(氷・湖南小)
会報委員	塚田 香織	(南・五箇山学舎)
紀要委員長	柴山 秀範	(富・新庄小)
紀要委員	新村 宏樹	(黒・明峰中)
紀要委員	豊島 寿郎	(富・奥田中)
紀要委員	ヒールー美架	(射・射北中)
紀要委員	西村 敬洋	(砺・砺波南部小)

◆全国公立学校教頭会役員

理事	井野由里子	(富・熊野小)
代議員	山本 泰	(富・南中)
研究部長	柴山 秀範	(富・新庄小)
要請部長	砂田 和夫	(滑・早中)
調査部長	澤村 力也	(高・伏木小)

◆東海北陸地区公立学校教頭会役員

理事	井野由里子	(富・熊野小)
理事	山本 泰	(富・南中)
研究部長	柴山 秀範	(富・新庄小)
要請部長	砂田 和夫	(滑・早中)
調査部長	澤村 力也	(高・伏木小)

全国公立学校教頭会「札幌大会」に参加して

富・月岡小学校 宮野 望

小・津沢小学校 江田 希

令和八年七月三十日、三十一日の二日間、札幌コンベンションセンターで開催された第六十八回全国公立学校教頭会研究大会に参加した。主題は「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」である。本大会は第十四期研究のスタートであり、「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」を視点を掲げて開催された。記念講演では、札幌出身の音楽プロデューサーである、葛谷好位置氏の話を拝聴した。氏は「前に進む」として、活動は失敗ではないと語り、挑戦し続ける勇気をいただいた。これからの子供たちの創造性を育むためには、決められたルールの中で様々な角度から物を見るようにすることや、多様な意見を面白がって聞いてあげる受容的な姿勢が大切だと説かれた。AI社会を生きていく子供たちには、技術に対応しつつも「この人だな」「それならいい」という人間らしさが不可欠であり、それを育むのはたくさんの経験であるとの言葉が、深く心に刻まれた。

分科会は、第四部会「組織・運営に関する課題」に参加した。活力ある学校をつくる組織マネジメントにおいて、活動が「推進力」と「潤滑油」となっている。教員の意欲を引き出していく重要性を再認識した。「何を託し、何を守り、何を進めるのか」の判断が持続可能な学校運営を支えていく。参集型・オンライン型を併用したハイブリット大会での開催方法、ペーパーレスの推進等、ICTを活用した運営も参考になった。各地の実践報告や全国から参集した教頭先生方とのグループ協議を通して、自校の課題を俯瞰し、改善の糸口を見出す貴重な機会となった。

「ボレイズ・ビー・アンビシャス」の精神が息づく札幌の地で、全国の仲間と語り、課題を分かち合った時間は心強い支えとなった。教育の転換期において、次期学習指導要領の動向を見据えつつ、各校が特色ある教育活動を展開するための羅針盤を示すことが、私たちにとって求められている。子供たちが夢と志をもち、未来を拓くために、まずは教員自身が働きがいを実感できる環境づくりに注力したい。本大会での学びと情熱を糧に、自らの在り方を常にアップデートし、魅力ある学校づくりを進めたい。未来を拓く子供たちの笑顔のため、これからも大志を抱き、確かな一歩を今ここから踏み出していく。

今年度は、サブテーマを「夢と志をもち 未来を拓く」に引き継ぐ力を育む。活力ある学校づくりの推進」として開催された。教師や子供、保護者や地域にとって魅力ある開かれた学校づくりのために、私たち教頭が「継続性」「協働性」「関与性」の三つのCの視点をもち、学校現場でどのようなリーダーシップを発揮していくべきかを学んだ。一日目のシンポジウムでは、大会サブテーマの言葉をキーワードにして、行政・保護者・学校の立場から意見交換が行われた。次期学習指導要領改訂で児童生徒の多様性の包摂が重視されていることから「夢や志」をもてるよう、自分らしさに気づき、不安や困り感を吐露できる環境が大切だという意見が出た。活力ある学校にするため、安心して信頼できる人間関係の中で、子供や教師が試行錯誤しながら成長するよう、教頭として支えていきたいと思った。

その後は、音楽プロデューサーの葛谷好位置氏の記念講演だった。「自分が感じる美しさ等の表現欲求が音楽に携わる原体験となった。米津玄師等のアーティストと活動する中でも、相手の感性や考えをリスペクトすることにつながった」と主体的な学びや協働的な学びの本質について何回か対話によって相手を知る、分かりやすく説明する、違う捉え方や不思議に思う意見も面白がる、自分へ意見しやすい雰囲気をつくるなど、一人一人の個性を生かす人材育成の秘訣を教わった。

二日目の分科会では、教育課程に関する課題を協議した。群馬県藤岡市では、小中学校九年間の連続した成長支援のため、小中で「授業づくり」のポイントを共有して指導することや、目指す姿を明確にして重点的な取組を定めることを組織的に取り組んでいる。連携推進の要は教頭であり、自己研鑽や働き方改革についても考える貴重な経験となった。



次の五十年に向けて

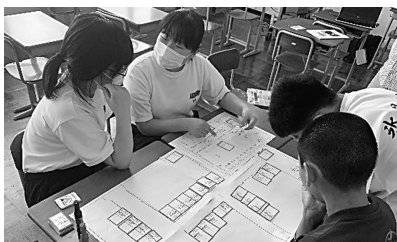
水・北部中学校 小山 千春

本校の校区は、氷見市の北半分を占め、海沿いの地域、農業用地、中山間地、多くの観光客で賑わう道の駅等、多様な地域からなります。また、令和六年一月一日の能登半島地震により被害を大きく受けた地区もあり、現在も復旧復興に取り組んでいます。令和六年、本校は創立五十周年を迎えました。重点目標を「次の五十年へ 挑戦こそ成長」と掲げ、震災を乗り越え、失敗しても成長と置き換えて前向きに生きる力を育むことを目指しました。

同年十月には、現・元育友会執行部や学校運営協議会委員、歴代校長、常任理事の方々等のご協力により創立五十周年記念式典が盛大に開催されました。記念式典後、「私たちはどう生きるか」をテーマに記念シンポジウムを行いました。アーティストや舞台女優、タレントとして第一線で活躍している本校卒業生の三名がシンポジストとして登壇し、夢に向かって諦めずに進むことの大切さを話されました。さらに、美しい歌声とピアノ演奏の協演で行われたコンサートは在校生への温かく力のこもったエールとして響き、前に向かって動き出す大きな力となりました。

被災後の新たな挑戦の一つとして、総合的な学習の時間の「防災教育」があります。氷見市地域おこし協力隊の方に講師派遣やフィールドワーク等、関係機関とのコーディネートをしていただき、探究的な学習を行っています。生徒たちは、自分たちの地区を想定して真剣に取り組み、それぞれの考えを導き出しています。

今後、北部中学校が地域の方から支えていただいていることに感謝しながら、これからの教育活動に創意工夫を凝らしていきたいと思ひます。



避難所設営ゲームの様子

あゆみ

東から

研修の

魚津市小中学校教頭会の取組

魚・道下小学校 山越 智子

魚津市小中学校教頭会は、市内小中学校の教頭七名で組織している。本年度も継続して「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」を研究主題とし、「学力向上部会」「心の教育推進部会」の二部構成で研修を進めている。

学力向上部会では、令和七年度に魚津市で新たに始めた「課題解明研修」を契機とし、学校間での授業互見に、より一層重点を置いた取組を行い、授業力の向上を目指している。「課題意識の高まり」「自己調整力の向上」を授業づくり・授業参観の重要な視点として、参観した授業で学んだことを自らの授業に生かすことができるようにしている。また、校区の垣根を越えて、小・中の交流が活発になり、授業だけでなく学級経営や学校行事についても互いに学び合える環境調整を目指している。

「心の教育推進部会」では、「魚津市ふるさとキャリア教育の推進」と「不登校児童・生徒に対する校内支援体制の充実」に関する研修を行っている。地域に愛着をもつための取組として数年前から取り組んでいる「ふるさとのおづカルタ」の作成が、今年度は最終段階に入った。内容の吟味・精選を進めて完成につなげるとともに、活用方法、各校への配付数等、効果的な活用策の確認・検討を行う。また、三年目となる各校の校内教育支援センターの運営の改善を図り、不登校児童生徒に対するよりよい校内支援体制の構築につなげる。

その他にも、講師を招聘しての研修、各校の情報交換等を実施しながら学び合い、教頭としての資質向上に努めている。学校運営の改善や児童生徒の学びの充実に寄与できるよう、今後も教頭会全員で協力しながら活動を進めていきたい。

高岡市小中学校教頭会の取組

高・伏木小学校 澤村 力也

高岡市小中学校教頭会は、市内の小中学校、義務教育学校、特別支援学校の教頭二十三名で組織し、「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」を研究主題に掲げて研修を進めている。

第一回全体研修会は小中学校合同で開催し、高岡市教育委員会より主幹をお招きして、市教委の方針や学校教育改革、教頭の職務等についてご指導をいただいた。また、今年度新設された高岡市教育総合支援センターからも次長をはじめ四名の先生方にお越しいただき、設置目的や方針、事業概要について説明を受けた。

第二回全体研修会では、同センターを実際に訪問して児童生徒が過ごす場を見学し、今後の教育相談等で連携を図るための具体的なイメージをもつことができた。

第三回全体研修会では、富山大学経済学部の中柳原教授をお迎えし、「デジタル社会のウェルビーイングと教員の働き方」と題して、学校の働き方改革の推進に向けたご助言をいただく予定である。

また、各研修会では中学校区ごとの情報交換の場を設け、教頭同士が学び合いながら、よりよい学校運営や隣接校との交流活動の在り方について知恵を絞っている。

「魅力ある学校」を実現するためには、まず教頭自身が近隣の小中学校を含めた地域のよさを実感し、教職員にとって働きがいのある学校づくりに取り組み、そして子供たちの姿を通じて保護者や地域の信頼を得ていくことが重要である。本会の研修を通じて、教頭職が互いに高め合い、元気になる取組を今後も進めていきたい。

あかし

「奥中プライド」をもって

富・奥田中学校 西岡 弘道

奥田中学校は富山市の中心部に位置し、商業施設や娯楽施設が点在する地域にあります。五つの小学校区にまたがるため生徒の多くは徒歩あるいはライトレール等の公共交通機関で通学しています。また学校選択制により他地区からの入学生も多い学校となっています。

本校では「奥中プライド」を掲げて活動に取り組んでいます。「奥中プライド」とは、一人一人が奥中生であることを誇りに思い、一人一人が当たり前のことを積み重ねることです。生徒はそれぞれの「奥中プライド」をもって活動をしています。

一昨年よりGIGAスクール構想推進校として、授業や校務でのICT活用に取り組みできました。手探りで始めた授業や校務での活用も、今ではICTを活用しない日はないまでになってきました。今年度は生成AIの活用について研究を進めています。

また、本校の生徒は地域ボランティアにも積極的に参加しています。富山県の観光名所でもある富岩運河環水公園の清掃活動「運河のまちクリン大作戦」には、毎回一五〇名を超える生徒が参加しています。美しい公園は奥田地区の誇りでもあり、地域の方々とのつながりを大切にする風土が育っていると感じられます。

七月には奥田中学校出身のプロバスケットボールプレーヤーである馬場雄大選手がサプライズ訪問してくれました。馬場選手は奥田中学校で過ごしたことが今の自分につながっていることや目標をもつことの大切さについて全校生徒に話してくださいました。ここにも「奥中プライド」を感じることができました。すべての活動の中に「奥中プライド」があるからこそ、素敵な奥田中学校をつくり上げているのだと感じています。

地域と関わり自分を見つめる「ふるさと教育」

南・福野小学校 奥野 滋仁

本校の校区は、南砺市の北部、砺波平野のほぼ中央部に位置し、福野中部・北部・南部・西部の市街地と農村部の地域からなっています。

本校は、平成二十五年より、地域の特色を生かし、地域との関わり合いを大切にした「ふるさと教育」に力を入れ取り組んでいます。この取組がユネスコスクールの理念と合致していることから、平成二十九年一月よりユネスコスクールに加盟しました。

ふるさと教育では、「人」「もの」「こと」に粘り強く関わりながら、課題を解決し、自己の生き方を考えていく子供の育成に取り組んでいます。

五年生は、総合的な学習の時間に地域の特産品である里芋について学習しました。地域の生産者と関わり、里芋の特徴や地域で栽培されるようになった理由を調べたり、実際に栽培したりする活動を通して、里芋の魅力を見付けました。その魅力をもっと多くの人に知ってもらい、地域のよさを広めたいと考え、地域の里芋祭りに参加し、学習をまとめ、PRしました。「里芋が地域の特産品であり続けてほしい」「里芋を使って地域を盛り上げたい」など、地域や地域との関わりについて考える姿が見られました。

国際理解の学習では、平成十二年度から続いているアメリカ合衆国リッチモンド小学校との交流があります。両校の子供たちは、二日間福野小で一緒に学習を行います。二日間の交流活動やリッチモンド小児童が福野地域での体験を話す様子から、「言葉や文化は違うが、関わり合い方を工夫することで仲よくなれた」「交流で地域のよさを見直した」など、他者との関わりや地域のよさを見直す姿が見られました。



学校活動の紹介

安心して学び、自分らしくのびる

中・高野小学校 野澤 伸也

本校は、恵まれた自然環境と地域の温かな見守りに包まれ、日々の教育活動を展開しています。学校教育目標「たくましく、かしこく、のびやかに」の実現に向け、重点目標として「安心して学び、自分らしくのびる」を掲げています。子供たちが、居場所やつながりを感じながら、自ら活動に取り組み、体験を通して達成感を積み重ねることで、自分らしさを支える自己肯定感を育むことを目指しています。

日常の授業や朝活動では、自分や友達の思いを丁寧に見つめ、互いに聞き合い、自らを振り返ること大切にしています。自分の素直な気持ちを語り、仲間からありのまま受け入れられる経験が、子供たちの心に深い安心感を育んでいます。



校舎裏の湧き水が流れる美しい流れでは、子供たちは進んで生き物を観察し、命の尊さに触れています。また、地域の方が整えてくださった畑での仕事をはじめ、あいさつ運動や掃除等「みんなのためにできること」を実践する「マイジョブ活動」にも主体的に取り組んでいます。湧き水を汲んで野菜のお世話をしたり、校内の環境を整えたりする日々の活動を通して、「誰かの役に立っている」という喜びと達成感を味わっています。

自然の恵みや地域の愛情、そして仲間と響き合える温かな環境は、本校の宝です。この確かな土台に支えられているからこそ、子供たちは「〜したい」「〜するぞ」と自分らしく可能性をのびさせていきます。

子供たちにとってうまくいかないこともあるでしょう。そのような時こそ、子供たちと共に、互いの思いに寄り添い合う場を大切にしたいと考えています。これからも「安心して学び、自分らしくのびる」場を支え、温かく見守る伴走者であり続けたいです。

学校活動の紹介

自然・人・文化に学ぶ「ふるさと学習」

射・大門小学校 奥田 貴一

「ふるさととは 命に満ちる」

これは、本校の校歌の題名であり、歌詞の一部です。この歌詞にあるように、本校では「自然・人・文化からのちを見つめる、豊かな体験を推進しています。

二年生は、生活科の学習で地域を巡りました。自分たちの生活を支えてくれる場所を見たり、四百五十年以上前からある寺院を訪ねたりすることで「地域のすてき」に触れます。三年生は、サクラマスの稚魚を育て、庄川に放流する活動を行い、命のつながりを学んでいます。四年生は、地域を流れる鴨川に入り、そこにいる魚や植物を観察したり、川遊びをしたりする中で、ふるさとの自然環境を学んでいます。五年生は、地域の防災に取り組む方々へのインタビュや防災施設の見学を通して、この地域を守りたいという思いを高めています。そして、一・六年生は校内で様々な交流を一緒に行うことで、支え合って生きることの大切さを学んでいます。また、



学校には校区の自然の縮図として地下水によるピオトープがあります。水温が低くきれいな水路には、バイカモが咲き、トミヨが繁殖しています。休み時間には、様々な学年の児童がピオトープ内に住んでいる生き物と触れ合っています。

子供たちのふるさと大門は、様々な命に満ちあふれています。この豊かな環境の中で、地域の方々にも支えられながら、豊かな心をもち、かしこく、たくましく成長してほしいと願っています。

探訪記

篝火が幻想的に水面を照らす幻想的なステージ。色鮮やかな衣装をまとった子供たちが誇らしげに躍動している。「鵜坂さんさい踊り」のお囃子に乗せて手足を大きく伸ばすその姿を、大人たちが目を細め、歓声を上げながら見守る。富山市南西部に位置する鵜坂で見られるこの様子は、子供たちの弾ける生命力と、地域全体を包み込む深い愛情とが交差する、美しく象徴的な瞬間である。

鵜坂の歴史は古い。奈良時代、越中の国守として赴任した大伴家持は、この地を流れる川のほとりで詠んだ二首の歌を万葉集に残している。

売比河（めひかわ）の
早き瀬（せ）ごとに
簪（かがり）さし

八十伴（やそとも）の男（を）は
鵜川（うかは） 立ちけり

【歌の意味】

婦負川の早い流れごとに篝火をともし、たくさんのお人（つかさびと）たちは、鵜飼を楽しんでいる。

鵜坂河（うさかわ）

渡る瀬多（せだ）み
この我が馬（あ）の
足搔（あがき）水（みづ）跳（は）ぬ
衣（ころも）濡（ぬ）れぬれ

【歌の意味】

鵜坂河（現在の神通川※諸説あり）は浅瀬が多く、そこを渡ろうとすると馬が足搔いて水を跳ね上げるため、自分の衣がすっかり濡れてしまった。

周辺からは、中世までの土師器や畑の遺構も見つかっている。ただ、この地は平坦な道ばかりを歩んできたわけではない。かつて深刻な公害に悩まされ、暗い影が落ちた苦難の時代もあった。しかし先人たちは故郷を諦めず、環境再生に心血を注いだ。その熱意が実を結び、今では多くの住宅団地が並び、絶えず新しい人が集まる活気あふれる土地へと生まれ変わった。困難を突破する住民の熱い思いは、今を生きる人々に脈々と受け継がれている。

ところが、現在の子供たちは、自分たちの暮らす土地がたどってきたこうした歩みや歴史を、実はそれほど深くは知らない。二限後の休み時間、所狭しとグラウンドを駆け回り、無邪気に笑い合う彼らは、日々の当たり前がどれほど思えないのにな。だからこそ、地域の人々は「どうか知ってほしい」と願い、熱心に子供たちに関わってくれる。雨の日も風の日も通学路に立ち、安全な登下校を見守り続けてくださる方がいる。豊かな自然の尊さを、目を輝かせて教え

てくださる方がいる。子供たちの多くはまだ、その圧倒的な無償の愛や、ありがたさに気付いていない。

だからこそ、学校がその思いを確実につなぐ架け橋とならなくてはならない。地域で学び、地域から学び、地域への愛情が育つように導くこと。それこそが、本校が担うべき最大の役割である。約三十年続く「売比河鵜飼祭」は、まさにその愛情の種が芽吹き、結実する舞台だ。子供たちは、祭り会場をきれいに保つため二十以上の手作りごみ箱を用意し、誇りをもって裏方を担っている。また、運動会では、一年生の頃から全校で親しんだ「鵜坂さんさい踊り」を全身で披露するしている。こうした地域行事での役割を通して、子供たちは周囲から注がれ続けてきた愛情に気づき、「人を愛し、地域を誇る心」を確実に自らのものにしていく。



全校で鵜坂さんさい踊りをする運動会



売比河鵜飼祭の会場のあちこちに置かれるアイディアが詰まったゴミ箱

悠久の歴史の重みと、幾多の困難を乗り越えてきた人々の情熱。そして、未来を生きた子供たちへ注がれる底抜けの温もり。この鵜坂の地に流れる優しい風。一度でも触れれば、きっと誰もがこの街を訪れなくなり、この愛すべき子供たちとともに働いてみたいと心惹かれるに違いない。

富・鵜坂小学校 横田 達也

学び舎 紹介

朝日町立さみさと小学校
伊東 啓一



本校は富山県東端の朝日町に位置し、北に日本海、南に朝日岳を望む豊かな自然に囲まれています。校名「さみさと」は律令時代の地名「佐味郷（さみのごう）」に由来し、古くから文化が拓けた歴史ある地域の温かな支援を受け、平成六年の四校統合による開校から今年で創立三十三年目を迎えました。本年度は、全校児童二二三名が毎日明るく元気な声を校舎いっばいに響かせています。このような学び舎の中で、学校の教育目標「自主的、創造的で心豊かな子供の育成」のもと、全教職員が一丸となって日々の教育活動に取り組んでいます。

朝日町では、令和四年度より「朝日町型保小中一貫教育」をスタートさせました。乳幼児期の保育から中学校卒業まで切れ目のない十二年間を町全体で見守り、豊富な地域資源と最先端の教育DXを掛け合わせ、子供たちの持続的な学びと成長を支えています。中でも町独自の教科「ふるさと科」では、朝日町の自然や歴史文化について地域のゲストティーチャーと共に学び、故郷への誇りと愛着を深めています。また、小中学校間での乗り入れ授業も実施しており、各校が連携しながら、町全体が一体となって子供たちの成長を支えています。

古くから文化が拓けた「佐味郷」の温かさや最先端の学びを両立させ、翡翠のように一人一人が輝く「さみっ子」の育成に、今後も学校と地域が一体となって邁進してまいります。

全国公立学校教頭会 令和八年度定期総会に参加して

研究部長 柴山秀範

富・新庄小学校

令和八年度全国公立学校教頭会第一回全国研究部長会が、七月三日(金)に、全公教役員十八名、各単位教頭会・副校長会研究部長五十五名がオンラインで参加して開催された。

午前の部では、全体会とブロック別協議が行われた。全体会では、会長挨拶や全公教研究テーマの説明、第六十八回札幌大会についての共通理解が図られた。特に研究テーマの説明では、「個々の力量に依存するのではなく、多様な教職員が強みを活かしながら協働的な学校組織をつくる必要がある」とあり、学年・分掌を越えた連携や対話を促進し、組織として課題解決に向かう体制づくりにおいて、副校長・教頭の果たす役割は極めて重要である」との話があり、身の引き締まる思いがした。ブロック別協議では、小グループに分かれ、「各学校における管理職としての課題」のテーマのもと、各学校の現状とその対応等について意見交流や情報交換が行われた。共通していた課題は、「若手教員とミドルリーダーの人材育成の在り方」「多様な児童生徒・保護者への対応の複雑さ」であった。どの学校でも、学年・学団等の人員配置と年齢構成を工夫して、課題に対応したり、外部機

関と、副校長・教頭が苦心しながら連携したりしていることが語られた。

午後の部は、東北大学大学院教育学研究科・教育学部教授 青木栄一氏による「副校長・教頭の働きがい高める学校マネジメント」の講演を拝聴した後、グループ別協議が行われた。講演では、長時間労働による身体的リスクと仕事におけるミスの増加との相関関係が説明された。そして、「管理職の仕事では、オーバーワークをしている教員にストッブをかけることが重要である」と話された。また、管理職としての学校経営における資質・能力として、「差」に敏感になること」が大切だと話された。「教職員の世代間の差」「教職員のストレス耐性の差」「教職員の負担の差」に敏感になり、「差に気付かない」「差があっても放置する」のではなく、「差をマネジメントする」ことが重要であること、そして、それぞれの「差」に寄り添って時間配分や分掌業務量、支援の量等を変えていくことが大切だとのことであった。その後、「活力ある学校をつくる副校長・教頭のリーダーシップ」教職員の力を引き出すことで生まれる副校長・教頭の働きがい」についてグループ別に協議した。その中で「自分なりに主体的に取り組んだとき」「働きやすくなった」と言われたとき」「意図的に教員を動かして問題を解決したとき」など、それぞ

れの経験の中で「働きがいを感じたとき」について共有した。また、副校長・教頭としての働きがいにつながる働き方改革についても話題が上がった。「資料作成時のAIの活用」や「率先して早く帰ること」「(教頭も)年次休暇が取得しやすい環境づくり」など、副校長・教頭のワークライフバランスも大切にしていくことが、結果的に学校の活力向上につながるという話も聞くことができ、有益な情報交換の場となった。

東海・北陸地区公立学校教頭会
第一回役員・理事会報告

富・南部中学校 山本 泰

六月十九日(金)、アイリス愛知にて第一回役員・理事会が開催された。本年度役員承認の後、吉松頼美会長(愛知)の挨拶、議事の審議となった。

議事の審議では、まず富山県から令和七年度会務報告と会計報告を行った。次に、愛知県から令和八年度事業計画と予算の提案があり、承認された。続いて愛知大会の宣言・決議案が承認された後、愛知大会の概要説明が行われ、特にQRコードによる新たな受付方法について、詳しい説明がなされた。また、令和九年度岐阜大会についても説明があった。

議事終了後に、各県との情報交換を行い、今井芳紀副会長(岐阜)の閉会の挨拶で役員・理事会を終了した。

令和八年度十月以降の
研修・研究大会のお知らせ

- ◆第五十四回 東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会
・期日 十月二十八日(水)・二十九日(木)
・場所 富山県立小中学校教頭会研究大会
・期日 十一月十八日(水)
・場所 パレプラン高志会館
- ◆東海・北陸地区公立学校教頭会第三回理事会
・期日 一月二十二日(金)
・場所 岐阜県岐阜市
- ◆全国公立学校教頭会中央研修大会
・期日 二月十二日(金)
※ オンライン開催
- ◆第四回 郡市代表教頭研修会
・期日 二月十日(水)
・場所 富山県教育記念館

編集後記

今年には熊本地震の発生から十年という節目の年です。復興に向けて歩み続けてこられた皆様に心より敬意を表します。しかし、その節目の年である七月二十八日、再び熊本県内で最大震度七を観測する地震が発生しました。改めて、災害はいつ私たちの身に起こっても不思議ではない現実であることを痛感しました。

学校は子供たちの命を預かる場であり、教頭には平時から危機を想定し、備えを積み重ねることが求められます。教職員同士が日頃から声を掛け合い、連携を深めておくことが、非常時の冷静な判断と行動につながります。子供たちの安全・安心を守るため、これからの一歩ずつ備えを積み重ねていきたいの思いを強くもちました。最後にありますが、ご多用のところ、原稿をご執筆いただきました教頭先生方に、心より感謝申し上げます。

編集委員

中森 晴美
山田 智徳 大崎 智子
黒田雄一郎 塚田 香織